

宇野重規著「政治哲学へ——現代フランスとの対話」東京大学出版会、2004 年 4 月 20 日刊を読む

「政治哲学へ」(I)

「政治哲学とは何か」の前に「哲学とは何か」を考える

1. (1)①「哲学(フィロソフィー)」という言葉は、よく知られているように、元々「知(ソフィア)」を愛することを意味した。
 - ②古代地中海世界のネットワークを背景に、古代ギリシアのイオニアの植民市で生まれた言葉である。
 - ③地中海世界の各地域の出身者がもたらした多様な情報の出会い、異なる世界観の遭遇こそが、哲学の母胎であった。
- (2)①それでは、哲学、すなわち知を愛するとは、いったい何を意味するのか。
 - ②哲学とは、人が知っているとはどういうことかをあらためて問題にすることにほかならない。
 - ③それまで自分たちが当たり前だと思い込んでいた知識を検討し直そうとしたときに、哲学は生まれたのである。
2. (1)①そのために必要なものは、まず言葉である。
 - ②言葉なくして、思考は成り立たないからである。
 - ③言葉によって、人ははじめて自分の考えを整理し、他者に伝えることができる。
- (2)ここには言葉の二つの役割が見て取れる。
 - ①一つは反省の手段であり、自分が考えていることを自分自身に対して明らかにする働きである。
 - ②もう一つは伝達の手段であり、ある認識を他者と共有する働きである。
- (3)①この第二の働き、すなわち他者と認識を共有するための手段としての言葉の働きによって、ある集団はその集団に固有な考え方、思考の型を持つようになる。
 - ②あるいはむしろ、ある思考の型が成立し、それを共有することで、一つの集団が形成される。
- (4)①このような集団が持つ思考の型は、それがいったん成立すると、時間を越えて持続し、人々の思考を規制するようになる。
 - ②場合によっては、硬直した思考の型が人々を支配することもありえよう。
- (5)①これに対し、古代イオニアの植民市で起きたことは、複数の、相異なる思考の型が出会い、ぶつかり、その結果として、言葉の第一の働き、すなわち反省作用が高度に活性化したということであった。
 - ②ある思考の型は、それ自体で完結しているとき、自らを疑うことはない。
 - ③自らと異なる思考と遭遇したとき、はじめて「知っているとはどういうことなのか」という問いと向き合うのである。

(6) 哲学とは、そのような反省的意識の産物にほかならない。

3. (1) ① このように哲学とは言葉の反省作用を介して、人が自己を振り返り、自己の知識を振り返ることを意味する。

② すなわち、それまで無反省に自明視していたことをあらためて吟味し直し、単なる思い込み—^{ドクサ}臆見—を越えた真の知識を得ようとする営みである [Strauss 1959:11.邦訳 6]。

(2) ① そうだとすれば、政治哲学もまた、哲学である限り、そのような言葉の力を借りた自己反省の営みの一翼を担っている。

② したがって、政治家に「哲学」を求める人もまた、単なる日々の利益配分や権力闘争を越えた、何かしら高次の知の反省的営みを求めているのである。

③ この場合、高次というのは必ずしも価値的に高いというわけではない。

(3) ① 日々の通常の思考そのものを自覚的に問い直すということの意味するに過ぎない。

② しかしながら、このような知の営みが、人間精神の高度な能力を必要とすることは言うまでもない。

4. (1) ① もちろん、このような知的営みについて、その過大評価はつねに厳しく戒められねばならない。

② というのは、言葉と現実の間に、つねに距離があり緊張があるように、政治哲学によって政治的現実のすべてを理解できるわけではないし、政治哲学が政治的現実を決定しているというわけでもないからである。

③ 政治的現実の多くが利害関係や力関係によって動かされていることは否定できない。

(2) しかしながら、だからこそ、そのような政治的現実を言葉で評価し、それを再検討し続けることが重要なのである。

(3) ① この評価自体が直ちに現実を動かすことはないとしても、言葉なくしては思考が成り立ちえない以上、長期的には言葉による評価が一定範囲内で現実を律し、やがて現実の一部となっていくからである。

② 言葉が即現実であると考えるのは観念論であるとしても、そのような言葉の力を信じることなくしては人は現実に対して無力である。

「政治哲学へ」(Ⅱ)

日本でも「政治哲学」を

1. (1) 一つの仮説は、使用する言葉の問題である。というのも、政治や哲学にまつわる用語のほとんどは翻訳語であり、翻訳語特有の抽象性が、政治や哲学の語りのアクチュアリティの障害となっている側面は否定しがたいからである。

(2) その結果として、現代日本の生きる人間が、自分たちの社会について原理的に省察し、その結果を言葉に置き換えようとするとき、どうしても政治哲学には満足できない、ということがあるかもしれない。

(3)①福沢諭吉が「演説」という言葉を考案して、公の場における政治的議論の経験を積む必要性を強調して以来、この課題は未完なままにとどまっている。

②いわゆる「永田町言葉」はともかく、政治学や政治評論の言葉にしても、日常の言葉とのずれは無視しがたい。

③しかしながら、日本語もまた日々変化している。平易でありながら、リアリティのある政治的言語を一步一步鍛えていくしかあるまい(本書もまた、言葉と現実の間により有効な緊張関係を生み出す一助になりたいと思う)。

2. (1)このような日本では、その時々において重要な役割を果たした諸理念が、必ずしも次の世代へと継承されなかった。

(2)これらの諸理念は多くの人々によって共有される明確な言語によって表現されることがないまま、その結果として、時の経過と世代の交代とともに忘却され、一つの伝統として積み上げられることがなかったのではないか。

(3)①丸山眞男はかつて、次のように指摘している。「あらゆる時代の観念や思想に否応なく相互関連性を与え、すべての思想的立場がそれとの関係で——否定を通じてでも——自己を歴史的に位置づけるような中核あるいは座標軸に当る思想的伝統はわが国には形成されなかった」[丸山 1961.5]。

②このような思想的座標軸の欠如の結果、日本の各時代の様々な知や議論は、蓄積されて座標軸を形成することがなく、時代ごとにつねに新しい動向が追い求められた。

③ある時代の議論はしばしば前の時代の議論を無意識に繰り返しているにもかかわらず、そのつながりは必ずしも十分意識されず、したがって有効な批判もなければ発展も生じない。

3. (1)この仮説が正しいとすれば、日本の政治哲学の無力さの一つの原因は、各時代の政治的議論が積み上げられず、したがって、新たに問題が生じた際に、いかなる理念に基づいてこれに対処すべきかについて、つねに議論を最初からやり直さなければならない点にあることになる。

(2)どこまで遡って問題を検討すべきか、どの原則が参照されるべきか、また修正されるべきか、その手続きはつねに不明瞭なままである。

(3)諸問題について、これをどのように理解し、どのように対応すべきかについての公共的合意の積み重ねを仮に政治文化と呼ぶならば、日本における政治哲学の無力は、このような意味での文化の未成熟と関係があるのではなかろうか。

4. (1)この未成熟は、物事の処理が順調に進み、あらためて原則や理念を問い直す必要が生じない時期にはさほど目につかないが、一度現行の制度や枠組みがうまくいかなかったとき、問題は突如顕在化する。

(2)一方にはひどく部分的・技術的修正を唱えるものもいれば、他方には抽象的・観念的にその全否定を唱えるものもいる。多様な議論は、自らの立場を他との関係においてうまく位置づけることができず、しばしば議論は迷走し、不毛に陥る。その原因は、参照すべき、規準

となるべき原則がいったいどこにあるのか、合意が存在しないことにある。

(3)①現在に合意がないとしても、過去を振り返って、ある時代になされた合意に遡って、議論をたて直せば問題がより明らかになることもある。

②ところが、過去からの議論の積み重ねがないと、そのような遡行も不可能である。あるのは過去の漠然としたイメージだけであり、念頭に置かれる過去も論者によってまったく異なるということになりかねない。

③思想的座標軸の不在こそが、現在の混迷を生み出すのである。遅まきながら、いまこそ政治哲学の議論の積み重ねのための営みを、開始すべきなのではなかろうか。

「政治哲学へ」(Ⅲ)

フランスの政治哲学

1. (1)フランスの政治哲学は、過去において分厚く蓄積された政治的議論の結果である。

(2)フランスの政治哲学の諸問題のうち、まったくのゼロから議論が始まったものは存在しない。

(3)すなわち、「政治」「デモクラシー」「権力」「人権と市民権」「国制」「共和主義と自由主義」のいずれも、過去の議論の蓄積を前提に、しかしながら今日的な革新が試みられている諸問題である。

(4)そこでたえず古典や過去の議論が参照されていることに、読者は驚かれるであろう。

(5)しかしながら、そのことは今日の議論が過去の繰り返しであることを意味しない。

(6)むしろ古典や過去の議論の持つ時代性が、今日的課題とぶつかりあい、鮮やかに現代という時代を照らし返していることに気づかれるはずである。

2. (1)元々、フランスの政治哲学は英米の政治哲学と比較して顕著な特性を持っていた。

(2)すなわち、その著しい原理的性格、抽象的性格である。

(3)デカルト的伝統は別にしても、その一因はフランス革命に求められるであろう。

(4)革命という激しい事件によって、フランス社会は過去とのより明確な断絶を経験することになった。

(5)新生フランスは、意図的に過去を「アンシャン・レジーム(旧体制)」として性格づけ、新しい社会の基礎を過去と切り離そうとした。

(6)とくにそれまで王国の一体性と歴史的連続性を保障する存在であった王権を打倒することで、新生フランスは否応なく、人権や人民主権をはじめとする抽象的な諸理念に依拠せざるをえなくなった。

(7)この結果、フランスの政治哲学は、原理的・抽象的な諸理念への強い傾斜を持つようになったのである。

3. (1)また、フランスの政治哲学にとって、強力な隣国の存在、すなわち英米の存在が重要であった。

- (2)モンテスキューやアレクシ・ド・トクヴィルのように、フランスは、英米の政治についての良き理解者を多く輩出した。
- (3)彼らは等しく英米の政治制度や政治慣習を高く評価し、時にはフランス以上の政治的自由の成熟をそこに見いだした。
- (4)しかしながら、そのような英米の政治制度や政治慣習の最善の解説者が、当の英米人ではなく、フランス人である彼らであった。
- (5)「人は自分自身については良き観察者になれない」という一般的な理由以上の理由がそこにはありそうである。
- (6)すなわち、歴史的な発展の中で漸進的に形成された英米の諸制度について、英米人自らは多くを所与の前提と見なす傾向があるため、必ずしもその秘密を十分に自覚してこなかった。
- (7)これに対し、英米人の最も身近な隣人でありながら、異なる政治的伝統に属し、かつきわめて原理的な考察への志向を持ったフランス人が、その秘密を明らかにしてきた。
- (8)その意味で、英米の諸制度がなぜ実際に有効に機能しているのか、その社会的基礎は何かということについて、英米人以上に原理的に追究してきたのが、フランス政治哲学の伝統である。

4. (1)そもそも、いったいいかなる条件に置かれたとき、ある社会において政治哲学は活性化するのか。
- (2)まず内部的条件としては、激しい変化によって過去との断絶が生じ、あらためて自らの基礎を原理的に考える必要にせまられることがあげられる。
 - (3)他方、外部的条件としては、異なる政治的伝統との接触が密になり、それとの関係において自らの伝統を振り返ることが考えられる。
 - (4)この二つの条件に照らして考えてみると、フランス社会は一方において、革命の前後で激しい歴史的断絶を経ることになったし、他方において、英米を一つのモデルとしてつねに強く意識せざるをえなかった。
 - (5)その背景にはもちろん、英米への、若干の劣等意識を伴ったライヴァル意識があった。
 - (6)その際、歴史的断絶をより原理的な考察によって克服し、英米モデルの卓越性を念頭に置きつつ、しかしそれとは異なる政治的伝統を築こうとした点に、フランスの政治哲学の発展の一因を見いだせる。
 - (7)そしてこのような諸条件は、形を変えて今日フランスの政治哲学を再活性化させつつある。

「政治哲学へ」(IV)

政治哲学の仕事

1. (1)フランス社会は、山積する問題と向き合うために、自らの歴史的・文化的な基本的枠組みを再確認しようと苦闘している。
- (2)それは、自らの社会の伝統や文化を普遍的であると誇る独善的なものではない。
 - (3)伝統的に“中華意識”を持っていると批判されることの多いフランスではあるが、むしろ

今日のフランスにおいて目につくのは、自国や自国の文化、自国の言語が、ローカルなものでしかないという意識である。

(4)そのようなローカル性の意識を前提に、しかしながら、あらためて自国の伝統を反省的に見つめ直し、そこから普遍的な意味を再度見つけ出そうとしているのがフランスの現状ではなかろうか。

(5)伝統を、一つの社会において、様々な領域において現われる精神的定型であるとするならば、自らの精神的定型がけっして普遍的なものではありえず、さらに言えば、それが今や根底的な動揺にさらされているという自覚の上に、かといってそれを否定するのではなく、自らを特殊なものとして居直るのでもなく、深く掘り下げ再検討に付すことで、苦境を乗り越えていこうという試みが今フランスでなされている。

(6)政治哲学が今日再活性化しているのも、そのような試みの重要な一環としてである。

(7)自らの社会の基本的な枠組み、その基礎にある合意を再確認するために、政治哲学が問い直されているのである。

2. (1)このような現代フランス哲学から学びうるものがあるとすれば、次のことではなかろうか。

(2)政治哲学とは、単なる政治的理想ではない。

(3)ましてや理想社会の恣意的な空想とはまったく別のものである。

(4)社会の現実についてのリアリスティックな認識に基づき、現在ある社会が過去からのいかなる原理の上に形成されているのかを反省する営みこそ、政治哲学である。

(5)当然のことながら、政治哲学は過去そのままの追認ではない。

(6)むしろ、自らの社会の基本的枠組みを構成する諸原理を自覚的に問い直すことによって現状と一定の批判的距離を持つことこそが、政治哲学の精髓であると言ってもよい。

(7)この批判的距離を持つことによって、はじめて規範的な評価が可能になり、また現実を変えていく可能性も生まれてくる。

(8)既存の状況への追従や既存のものの考え方への埋没から脱するためにこそ、現実についての原理的根拠を問うこと、それが政治哲学の仕事である。

3. (1)政治哲学の存在は、その社会におけるデモクラシーの存立とも深くかかわる。

(2)いかなる社会にも問題は山積している。その点については、例外は存在しない。

(3)しかしながら、もし各社会に違いが生じうるとすれば、そのような諸問題に取り組む姿勢において、市民が自らの社会に対し基本的な信頼感を持っている社会と、そうでない社会の違いであろう。

(4)そのような信頼感はどのようにして生まれるか。

(5)どれだけ問題があるとしても、自分たちは自らそれを克服するために努力しているし、どれだけ遅々としていても、長い目で見れば問題解決に向けて一步一步進んでいると思えることからのみ、社会への本質的な信頼感は醸成される。

(6)ある社会の精神的な尊厳性も、このような信頼感とは無縁でない。このような自己への信頼感を持つために、自らの社会の基本的枠組みの絶えざる検証と確認が必要なのである。

4. (1)自らの社会を自らの力で変革していくために必要なもの、それは自らの社会の基本的枠組みについての公共的合意であり、それを作り出し確認するための思想的座標軸である。
- (2)これはまさしく、政治哲学の営みである。
- (3)現代フランス政治哲学の検討は、このような政治哲学のあり方を知るために、またとない実例を示してくれるであろう。
- (4)したがって、現代フランス政治哲学との対話は、日本社会において真に自らの政治哲学を築いていくための、第一歩なのである。

<コメント>

「政治哲学とは何か」を考える前提として、「哲学とは何か」をまず考えることが求められる。この宇野先生の「哲学とは何か」はとてもわかりやすく、すべての領域での「哲学入門」として極めて示唆に富むものです。じっくり「理解」、「深く理解」、「哲学とは何か」を「自分のことばでいえる(表現・説明できる)」ようにいたしましょう。

2026 年 1 月 7 日(水)